九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

「45分ペアクラス」の試み ： 現在のカリキュラムの枠内での改革

田畑, 善之
九州大学言語文化部

https://doi.org/10.15017/5367

出版情報：言語文化論究. 6, pp.11-19, 1995-03-10. 九州大学言語文化部
バージョン：
権利関係：

「45分ペアクラス」の試み
——現在のカリキュラムの枠内での改革——[1)]

田 畑 義 之

1．はじめに

ほとんどの大学では，ドイツ語などの未修外国語は，1コマ90分の授業が週2回という形で行なわれているが，集中して練習することが求められる外国語の演習には90分は長すぎるし，週2回の授業回数は逆に少なすぎる。一方，慶応大学湘南藤沢（SFC）では，1言語を1コマ50分で週8回というインテンシブ授業で大きな成果をあげている。

このＳＦＣ方式をアレンジして，普通の大学で，しかも現在のカリキュラムの枠内で導入する試みとして，筆者は，93年度から同僚のDaniela Sieber氏と一緒に担当している九州大学の1年生のドイツ語の授業において「45分ペアクラス」という形の授業をPilot-projektとして行なっている。本稿では，この「45分ペアクラス」が導入された経緯と実際の授業の内容を紹介すると共に，この「45分ペアクラス」の利点と問題点を考察する。

2．「45分ペアクラス」導入の経緯

2．1．90分授業の問題点

日本のほとんどの大学で行なわれている1コマ90分を週2回という授業形態は非常に無駄が多い。まず，前章でも触れた1コマの長さと，授業回数の問題であるが，単に知識として覚えるのではなく，本当にその言葉を身につけるためには，受身の態度で授業を「聞く」のではなく，能動的に「演習」を行なうことが不可欠であるが，そのためには90分という授業時間は長すぎる。90分の間緊張を持続して集中していられる学生はほとんどいない。また，外国語の学習には繰り返しが大切であり，1週間に2回しか授業がなければ，どうしても次の授業までに前回学習したことの大部分を忘れてしまうので，毎回復習だけでかなりの時間を取られてしまう。したがって1コマの長さは45分ないし60分として，コマ数をその分増やすようにするのが理想的であると考えられる。

非常勤講師に頼らざるを得ない現状から，多くの場合はこの週2コマの授業が「文法」と「読本」に分けられ，2人の別々の教官が担当する形になっているため，さらに多くの問題が生じている。この方法は2人の別の個性を持った教師に接することができること以外には，中途半端で全く利点がない。「読本」の時間は，とくに前期の段階では文法をほとんど修得していないので，非常に単純な，従って人工的で，全く面白くないテクストを読むことになるか，あるいは「文法読本」を使用して，文法の説明を加えながら，テクストを読むことになる。その場合は，テクストを読むためだけのアリバイ的な文法説明を行なうか，もしくはきちんと体系的に説明するならば，「文法」担当の教師が既にした（あるいはこれからすることになる）「説明」を繰り返すことになる。必要なのは修得した知識を使いこなすための練習であるのに，もともと週2コマしかない授業が「文法」と「読本」に

分けられているために，「文法」担当の教師も１コマ１年間で一通り終わらせるためには「説明」だけで手いっぱいで練習はできないので，結局学生は「説明」だけを２度聞かされることになってしまう。

2．2．九大のペアクラス

上記のような問題点を解決するため，九州大学では以前から１年生のドイツ語の授業は週２コマとも一人の教官が担当することになっているが，それに加えて十数年ほど前からは「ペアクラス」方式の授業が導入されている。「ペアクラス」方式とは，日本人教官と外国人教官がペアになり，１つのクラスを２人でそれぞれ週１回ずつ担当するというものである。ペアとなった教官は，同じ教科書を使用し，直接話し合えない場合でも連絡帳を用いて進度や授業内容上の連絡事項を伝達する。「ペアクラス」の学生は，最初からネイティブの先生に接することで，外国人に対する偏見や苦手意識を持たず，ネイティブの先生相手に，実際のコミュニケーションの手段としてドイツ語を使うことができるという利点がある。[2)]

ただしこの「ペアクラス」に対しても次のような問題点が指摘されている。

①休講の場合には役割分担が崩れてしまう。

原則として日本人教官が文法説明などを担当し，外国人教官が発音訓練や質疑応答の練習などを担当するという役割分担をしておいても，学会や祝日などで休講になると，その分担が崩れてしまい，一方の先生が教えたところの次からもう一方の先生が続きをやるということになって，せっかくの外国人教官とのペア授業の利点が生かされなくなってしまう。

②ペアの相手の先生によって，教科書や授業方針が異なるので打ち合せが大変

③ペアクラスの理想を実現するには時間が足りない

１年間という限られた時間では「ペアクラス」の授業方法を生かすことは難しい。さらには，２年生の授業が旧態依然とした文学作品等の講読というのでは，「ペアクラス」でも１年間で接続法まで扱うことが至上命題となってしまい，本来の趣旨である「練習を通して学生にドイツ語を身に付けさせる」ことができなくなってしまう。[3)]

2．3．慶応大学ＳＦＣのインテンシブ・コース

1990年４月に開設された慶応大学湘南藤沢キャンパス（ＳＦＣ）の総合政策学部と環境情報学部では，周知の通り外国語教育に非常に力を入れている。１・２年次は１言語を１コマ50分で週８回というインテンシブ授業が実施されており，自主制作の共通テキスト，ビデオを使ったネイティブ教官とのチーム・ティーチングで大きな成果をあげている。このインテンシブ・コース以外にも，１年春学期の「総合講座」や，４年間を通じての外国語カリキュラム（中級・上級／教養外国語）などが導入されている。[4)]

ＳＦＣの外国語インテンシブ・コースには，各地の大学から多くの見学者が訪れ，その施設やカリキュラムは高く評価されているが，その一方で，ほとんどの見学者が「ＳＦＣだから（慶応大学だから，または新設学部だから）できたのであって，うちの大学ではとても無理」と考えているという。しかし普通の大学では本当に実現できないのであろうか？

2．4．「ドイツ語コミュニケーション」から「45分ペアクラス」へ

2．4．1．幻の「ドイツ語コミュニケーション」

「ＳＦＣだからできた」と言って諦めてしまうのではなく，普通の大学でも実現可能なプランを作成しようと，1992年夏に九大言語文化部ドイツ語科では「ドイツ語コミュニケー

ション」という新しい科目の設置が提案された。「ドイツ語コミュニケーション」は，45分の授業を週4回行ない，日本人教官と外国人教官がそれぞれ2回ずつ担当する，という自由選択科目で，前期に「ドイツ語コミュニケーションⅠ」，後期に「ドイツ語コミュニケーションⅡ」をそれぞれ2クラスずつ開講し，[5] 学生は今までの90分の授業が週2回の「ドイツ語Ⅰ・Ⅱ」の代わりにこの科目を選択できることになっていた。93年度から開講される予定で，言語文化部の教務委員会と教授会でも承認されたが，教養部の教務委員長との交渉の段階で，94年度から教養部が廃止され，大幅なカリキュラムの改編が予定されていたことと，他の90分授業の科目との混在が時間割編成上難しい等の理由で，この科目の新設は認められなかった。

2．4．2．「45分ペアクラス」

そこで次善の策として，時間割上は従来の（90分を週2回の）ペアクラスと同じであるが，実際には1コマ90分の授業を2つに分け，前半45分を日本人教官が担当し，後半45分をドイツ人教官が担当するという「45分ペアクラス」という形で45分授業を実施することになった。（普通の「ペアクラス」，「ドイツ語コミュニケーション」「45分ペアクラス」の時間配分と担当する教官の関係については次の図1を参照。Jは日本人教官，Dは外国人教官の担当であることを示す。）

「45分ペアクラス」は93年度には文系に2クラス開講された。[6] 受講者はそれぞれ20名と24名であるが，受講希望者は，その倍の42名と54名であった。94年度には時間割の都合から理系（工学部）に1クラスのみの開講となった。受講者は24名で，受講希望者は94名[7] であった。

図1

普通のペアクラス

	月	火	水	木	金
1					
2		J			D
3					
4					
5					

ドイツ語コミュニケーション

	月	火	水	木	金
1					
2					
3					
4		D			D
5	J			J	

45分ペアクラス

	月	火	水	木	金
1					
2		J D			J D
3					
4					
5					

3．「45分ペアクラス」の授業内容と特徴[8]

3．1．Lehrziel と授業の特徴

このクラスではドイツ語の基礎的な運用能力を身につけさせることを目標としている。その際，3．2．で述べるように，読解用テクストのパラレルテクスト[9] を用いて作文や聞き取りの練習を行なうなど，「読む」「書く」「聞く」「話す」の4技能を関連づけて習得できるよう配慮している。

授業は，2週間（＝45分授業を8回）を1サイクルとして1課に当て，日本人教官が基本を導入し，ドイツ人教官がその応用練習を担当するというパターンを基本とし，前半45分と後半45分のみならず，1サイクル8回の授業がそれぞれ有機的なつながりを持つように組み立てられている。市販の教科書は使用

せず，ビデオ教材と，絵を多用した手作りのプリントを用いて，授業時間の大半をペアワークやグループワークでの練習に当てている。[10] 教師はコーディネーターに徹して，学生になるべく多くドイツ語を使わせることを目指している。

机はコの字型に配置している。[11] これによって学生はお互いの顔を見ながら練習をすることができるし，「学生は教師と向い合って正面を向いて座るもの」という今までの固定観念を変えることで，「この授業は今までの外国語の授業とは違うんだ」という意識を持たせるという効果もある。

学期の始めに学習目標，評価方法等を明示しておくことも重要である。ネイティブの先生の試験は面接試験であることを予告しておけば，学生は自然と対話練習に力を入れるようになる。また，1年間の学習の成果が目に見える形で残るようにするため，ドイツ語の文集を作ることにしている。[12]

3．2．2週間（8回）の授業の流れ

1サイクル8回の授業の流れは図2のようになっている：

1日目の前半45分は，日本人教官が担当し，まず最初に前の課の小テストを10分程度で行なう。次に新しい課のキーセンテンスと文法を導入する。文法の説明は必要最小限とし，しかもなるべく教師が一方的に解説してしまうのではなく，学生に自ら規則を発見させるようにしている。[13] 宿題は今回学習した文法事項が理解できているかどうかを確認するためのプリントで，わからなかった部分については裏に質問として書かせる。この宿題は次回の授業の前日までに提出させ，学生の理解が不十分なところについては2日目の授業の時にもう一度説明する。後半45分は外国人教官の担当で，最初はやはり前の課の小テストが行なわれる。その後は，日本人教官によって先ほど導入されたキーセンテンスのバリエーション（変形）練習で，この練習は文字を与えず，全て口頭で行なわれる。授業の最後に，練習に使った文のプリントが配られ，授業中に mündlich に行なった練習を schriftlich にもう一度やるのが宿題となる。

2日目の前半は，日本人教官による基礎練習，後半は外国人教官による応用練習が行なわれる。練習はペアワークなどの口頭練習・対話練習が多い。同様の対話を書いてくることが宿題として課せられる。

3日目の前半は，外国人教官が担当する応用練習（その2）が行なわれる。外国人教官担当の練習では，可能な限り実物（Realien）もしくはそのコピーが教材として使われる。[14] 後半は日本人教官が市販のビデオ教材を用いた授業を行なう。ビデオをシーン毎に3回ほど繰り返して見せるが，その際学生には，予め配布しておいたプリントの質問の答えを捜

図2　2週間（8回）の授業の流れ

	Hausaufgaben
①J：テスト，キーセンテンス＋文法 ②D：テスト，キーセンテンスの Variation	文法理解確認 → schriftlich
③J：Übungen ④D：Übungen	
⑤D：Übungen ⑥J：Video	Lückentext, Fragen zum Text
⑦D：Fragen zum Video ⑧J：Übung, Lesetext	→ schriftlich 和文独訳

しながらビデオを見るように指示する。プリントの質問は空欄に適語を補充したり，3～4の選択肢の中から正しいものを選ぶという簡単なものがほとんどで，ここでは，大意把握のような大まかな内容理解を目指している。その後でビデオのスクリプトと日本語訳のプリントを配布して，説明と発音練習を行なう。宿題は，ビデオテクストを吹き込んだカセットテープを聞いてLückentextの穴埋めをすることと，配布されたビデオテクストの内容についての質問と答えをドイツ語で5つ書いてくる，というものである。ドイツ語による質問を自分で作るというのは，次の外国人教官の授業の予習も兼ねている。

4日目は前半45分が外国人教官の担当で，ビデオをシーン毎に見ながら，学生に次々と質問をしていく。この質問は，ほとんどがW-Fragenで，前回の日本人教官の授業でおおまかな内容理解はできているので，さらに詳しい理解が求められる。先生の質問が書かれたプリントは授業が終ってから配布されるので，学生は宿題として今度はschriftlichにそれに答えることになる。後半は，日本人教官による練習とテクストの読解が行なわれる。読解と言っても和訳ではなく，ドイツ語による質問の答えを捜しながらテクストを読むことにより，一語一句にこだわらずにテクストの大意を把握するのが目的である。宿題はこのLesetextのパラレルテクストの和文独訳で，これは次回の小テストで出題されるHörtextの準備も兼ねている。[15]

この他に，1日目以外の3日間は，前半45分と後半45分で教師が交替する時にドイツ語の歌を歌うことにしている。歌はその課の文法に関連するものを選んでいる。[16]

4．「45分ペアクラス」の長所と問題点

4．1．長所

「45分ペアクラス」の長所をまとめてみると，次のようになる：

①45分間なら学生は集中することができる。
②45分きっちりと授業するので時間が有効に使える。[17]
③45分で内容・教師が変わるため，学生は気分転換ができるし，日本人教官が基本を導入し，外国人教官が応用練習を担当するという役割分担が明確になる。
④日本人教官と外国人教官の授業が同じ日にあるので，休講等で役割分担が崩れることがない。
⑤45分で1つの課題を扱うため，冗長な説明等がなくなり，方法を工夫するようになる。[18]
⑥学習したことをただちにネイティブとのコミュニケーションに使えるので学生は達成感を得られる。

このように45分授業には様々な利点があり，以下のアンケート結果[19]にもみられるように，学生からも支持されている。

☆45分のペアクラスと90分の他の外国語の授業を比較すると…

1）45分の方が良い　2）90分の方が良い
3）わからない・どちらとも言えない

	'93A	'93B
1）45分：	15名(88.2%)	20名(87%)
2）90分：	0名	1名(4.3%)
3）？：	2名(11.8%)	2名(8.6%)
計：	17名	23名

	'94	合計
1）45分：	19名(79.2%)	54名(84.4%)
2）90分：	0名	1名(1.6%)
3）？：	5名(20.8%)	9名(14%)
計：	24名	64名

1）を選んだ理由（主なもののみ）：

・45分で切り替えができて飽きずに授業を受けることができる。
・90分は長すぎて退屈。
・気分転換がはかれるから集中力が持続する。
・45分授業の方がメリハリがつき，ねむくならない。
・45分ペアクラスの方が２人の先生が一生懸命教えて下さるので，すごく丁寧だし楽しいから。
・授業中にだらだらとした時間がない。
・90分授業の先生は，どうせ90分あるんだから，と遅れて来たり早く終ったりするが45分授業ではそれがなく，緊迫した雰囲気が味わえる。
・同じ内容をしても２人の先生から習うと勉強になる。

２）を選んだ理由：
・あとで○○先生が説明します，という間がないので。[20]

３）を選んだ理由：
・90分授業のクラスが実際どんな授業をしているか受講したことがないので。

４．２．問題点

「45分ペアクラス」の問題点の最大のものは，教師の負担増である。「45分ペアクラス」が担当できるように時間割を組むことで，出講日が増える場合もあるし，毎回プリントして配布する教材の作成と，宿題のチェックや小テストの採点には大変な時間を費やすことになる。

出講日に関しては，45分単位の授業が多数派になれば，解決できる問題であろう。また教材の作成も，「45分ペアクラス」を担当する教官が増えれば分担して作成することが可能になり，１人の教官の負担を減らすことができる。宿題や小テストの採点に関しては，１クラスの人数と教官１人のノルマとしての担当コマ数を減らすか，あるいはＳＦＣでやっているようにＴＡ（Teaching Assistant）やＳＡ（Student Assistant）に手伝ってもらう以外には解決の方法はないかもしれない。

さらには，45分授業に限らず，外国語の授業に共通することとして，劣悪な授業環境の問題がある。すなわち，ほとんどが大人数クラス用の固定机の教室しかないため，ビデオや教材提示装置を使いたい場合は，数少ないＬＬ教室を取り合うか，重たい機材を自分で運んでいかなければならないのである。ＬＬ教室以外にもビデオ，オーディオカセット，ＯＨＰまたは教材提示装置を備えた，しかも机の移動ができる外国語授業用の教室の設置が望まれる。

５．今後の課題と展望

今後の課題としては，より学習効果の期待できる教材の開発があげられる。すなわち，学生に自ら問題を発見させ，解決させる教材や，ゲーム的・シュミレーション的要素を取り入れた知的な練習のための教材の開発が望まれる。また，ヒアリングの練習をもう少し体系的に行なえるように，現在の２週間サイクルの授業の流れに宿題やＬＬでの自習を組み込んだ形の授業計画にすることも考えている。

現在のように45分＋45分の授業を週２回行ない，日本人教官，外国人教官それぞれが週２回ずつ担当するというシステムでは，必ず週２回の出講が必要となるため，このクラスを担当できるのは専任教官のみ，ということになってしまうが，45分単位の授業数がもっと増えて，しかもＳＦＣでやっているように各時間にやることを予め決めておくことができれば，非常勤を含めて４人の教官で45分ずつ担当することも可能である。私見では日本人教官については，専任が２回共担当すべきだと思うが，専任の外国人教官が少ない，もしくはいない場合には，こういった形で分担

することも可能であろう。いずれにしても，この「45分ペアクラス」を数人の教官による私的な試みに終らせないためには，同僚の理解と，積極的な参加の追及が不可欠であり，より効果的な教材開発と共に今後の課題である。

注

1）本稿は，1994年7月9日に日本独文学会西日本支部の第18回「西日本ドイツ語教授法ゼミナール」で行なった口頭発表に加筆したものである。

2）九大の「ペアクラス」については，根本(1985)を参照。当初は文系の学生のみを対象に7クラス程度開講されていたが，本年度からは理系も含め全学生が対象となった。学生は「ペアクラス」と日本人教官が週2コマとも担当する「日本人クラス」のうち，どちらかを希望により選択することになっている。本年度は，ドイツ語Ⅰの総クラス数52クラスのうち，外国人教官が週2コマとも担当する「ドイツ人クラス」を含む「ペアクラス」の数は18クラス（34.6%）であった。

3）この問題を解決するため，九大では数年前から，2年生の授業に選択制を導入している。文学作品の講読以外にも，ビデオ教材を使った授業や，外国人教官による授業も開講され，「ペアクラス」で学んだことを生かせるようになった。さらに来年度からは2年生にも日本人教官と外国人教官が週1回ずつ担当する「ペアクラス」が開講される予定である。

4）ＳＦＣの授業内容については，関口(1993)に詳しい。

5）この科目は，現行の90分授業のカリキュラムの中に変則的に開講するため，ほとんどが1時限目(90分の後半)と5時限目(90分の前半)に開講される予定であった。

6）授業を担当したのは，いずれもDaniela Sieber氏と筆者である。

7）94年度は，5クラス程度をまとめたブロック毎にクラスを選択することになっていたが，このブロック(理科の14組～18組)には，日本人教官が週2コマ担当する「普通クラス」か，この「45分ペアクラス」の2つしか選択肢がなかったので，この数字は必ずしも「45分ペアクラス」が支持されたものと考えるわけにはいかない。

8）この「45分ペアクラス」については，Kimball(1993)でも扱われているので参照されたい。

9）パラレルテクストとは，基本的な構成が同じで，細かい事項のみが異なっているテクストのことで，例えば「週末にMonkiaと車でWienへ行く」という話がパラレルテクストでは「夏休みにFrankと飛行機でBerlinへ行く」という話になったりする。

10）練習の中で一番多いのはインフォメーション・ギャップを利用したペアワークで，この形式の練習はDreke/Lind (1986)「Wechselspiel」に多数収録されている。「Wechselspiel」は，そのままコピーして授業で使えるようになっているが，そのままでは量が多すぎるので，設問の数を減らしたり，イラストを変更したりして利用している。その他，文法の規則発見は，4～5人程度のグループ作業で行なうことが多いし，教師から質問された学生が次の学生を指名して質問を続けていくKettenübungや，クラス全員が立ち上がって教室の中を歩き回りながら決められた人数の学生に対してインタビューする形式など，多様な練習形式を取り入れている。ペアワークの効果については，藤本(1992)を参照。

11）毎回授業の前に学生が机を並べ替えることになっている。

12）冬休み明けに第1稿を提出させ，まず日本人教官の添削を受けて再提出，さらにもう一度，

今度は外国人教官に添削してもらったのを清書して完成となる。

13) 大脳生理学などの知見によれば，単に説明を公式のように与えられた場合は，左脳に記憶されるが，自分の頭で考えて，規則を発見する場合には右脳に記憶され，記憶が長く保持されると共に，自分自身で問題を解決する能力として身につくとされている。記憶のしくみについては，Vester(1978)および Uemura(1993)を参照。

14) 例えば列車の時刻表やレストランのメニューなど。

15) この Hörtext も，Lesetext や和文独訳の宿題とパラレルテクストになっている。

16) 1年次で扱う歌はほとんどが Kind(1983)のものを使っている。ドイツ語の授業における歌の使用については，小栗(1988)も参照。

17) 90分授業の場合，教師の方でも長すぎる，あるいは時間は十分にある，という意識があるためか，10分くらい遅れて来るのが当然とされ，10分遅れて来た上に，さらに5分前には授業をやめるという教官もいる。もし毎時間10分遅れて来るとすると1年間では10分 x 週2回 x26週＝520分（8時間40分）も無駄にしてしまう計算になる。45分授業の場合は1分でも無駄にできないので，授業のベルと同時に授業を始め，2人で90分間きっちりと授業することになる。

18) ただし45分ではどうしても短かすぎる場合が多いので，できれば50分授業の方が良いと思われる。ＳＦＣでは50分授業が行なわれており，関口(1993：51)では45分と50分の間には5分以上の差があることが述べられている。

19) 93年度の2クラス（'93Ａ：20名／'93Ｂ：24名）に対しては夏休み前の最後の授業で，94年度の1クラス（'94：24名）に対しては，前期が終了した時点で行なった。

20) これは，93年度の前期は第1時間目には文字を全く見せずにネイティブの教官がキーセンテンスの導入とそのバリエーションの練習を行なうことにして，そのあとで日本人教官が文法の説明をする，という形にしていたためであると思われる。この形式は不評であったため，93年度後期からは，まず日本人教官が第1時間目に文法説明とキーセンテンスの導入を行なうという形に改めた。したがって93年度後期の終了時点で同じ質問をしていたら，この学生も2）は選ばなかったかもしれない。

参考文献

Dreke, M./W. Lind (1986): Wechselspiel, Langenscheidt Berlin und München.

藤本純子（1992）：「学生の私語と沈黙にどう応えるか」『ドイツ語教育1992』Goethe-Institut Tokyo/Osaka, S. 130-146.

Kimball, J. (1993): From Deference to Dialogue: Shifting the Dynamics for Asian Learners of European Languages. In: The Reorientation of Foreign Language Education (韓・日国際学術会議発表論文集).

Kind, U. (1983): Eine Kleine Deutschmusik, Langenscheidt Berlin und München.

根本道也（1985）：「大学教養課程におけるドイツ語教授法について　―反省と提案―」『独仏文学研究』第35号，Ｓ．213-232.

小栗友一（1988）：「歌のあるドイツ語授業」『ドイツ語教育部会会報』第34号，Ｓ．28-30.

澤田昭夫（1984）：『外国語の習い方』講談社.

関口一郎（1993）：『慶応湘南藤沢キャンパス・外国語教育への挑戦』三修社.

田畑義之 (1990)：「これからのドイツ語教育のためのカリキュラム改革私案」『第39回九州地区大学一般教育研究協議会議事録』，S．92-94.

――― (1992)：「学生の積極的参加を促すビデオ教材の利用法」『ドイツ語教育1992』, Goethe-Institut Tokyo/Osaka, S. 111-127.

田中俊明 (1993)：「変革期のドイツ語教育 ―学習効果の上がる授業への改善―」『独仏文学研究』第43号，S．21-39.

田中　裕 (1992)：「"訳読"は時代おくれではないのか？　―タテマエと実情の落差―」『ドイツ文化』第47号，S．77-88.

Uemura, Ken'ichi (1993): Gehirn, Geist und Lernen. In: Dokumentation des 1. Didaktik-seminars für japanische Germanisten 1992, Goethe-Institut Tokyo, S. 32-44.

Vester, F. (1978): Denken, Lernen, Vergessen, München.

吉井巧一 (1988)：「Aktiv lernen　― mit Freude und Erfolg」『ドイツ語教育部会会報』第34号，S．24-27.